

鎌倉の集落形態に関する地理学的研究

八 村 圭 子

源頼朝の幕府開設によって政治・宗教都市として成立した鎌倉が、その後観光保養都市、別荘地、そして首都圏の1ベッドタウンへと変貌していった過程を、人間生活の根拠地たる集落にスポットをあてて考察してみようというのが、本論のテーマである。

鎌倉が都市として史上に登場するのは12世紀末、今を去る800年の昔である。当時「鎌倉」と呼ばれたところは、滑川沿岸の低地と北条氏の私領であった山ノ内のあたりに限られていて、外部との連絡は切通しと和賀江の港（現存する日本最古の港湾施設）を経てなされていた。東、北、西を標高100m前後の小高い丘陵に囲まれたこの小さな町が、一国の政治の中心地となり、ここで養われた文化が日本文化史上に画期的な一時期をもたらしたのである。しかし、鎌倉は奈良や京都のように、最初から都市として建設されたのではない。源氏ゆかりの地で、しかも要害であるというので頼朝が居を構えた。それが事のなりゆきで時の政権の所在地となり、そして自然発生的に都市へと成長していったと考えられるのである。

しかし、幕府滅亡とともに鎌倉は衰退の道を辿り、再びかつての半農半漁村と帰ってしまった。その鎌倉を現在の姿に導いたきっかけは、明治22年の横須賀線の開通である。この鉄道路線の進出は鎌倉に近代文明を送りこむと同時に、別荘地、高級住宅地という全く新しい形の都市へと変貌させた。これを私は鎌倉における「第2の都市化」と名付けた。鎌倉時代の鎌倉が八幡宮付近を核として市街を拡大していったのとは反対に、この時期の市街化は南部の海岸地域から北上するかたちで進められ、バラバラに存在していた村々を連帯化していった。

そして第2次世界大戦後、一時企業進出の時期を経て、今や鎌倉は戦前の「高級」イメージをうけつぎながらも、より庶民的な住宅都市へと変貌しつつある。昭和35年以降、鎌倉の宅地造成は破竹のいきおいで進められ、ブルドーザーの響きは旧市街周辺の丘陵地を著しく変容させた。

無謀な宅地造成によって古都の自然が失われていくことは誠に痛々しい忌むべき事態である。しかし、鎌倉における宅地化そのものについて、私はそれほど否定的な考えをもっていない。京浜地区に隣接し、しかも気候風土に恵まれている鎌倉の地を、中世のままの姿にとどめて箱庭的存在にしてしまうのは、この狭い日本にとってむしろ重大な損失ではなからうか。鎌倉は今や新しい都市へと生まれ変わろうとしている。住宅にせよ、公共建造物にせよ、格調の高いより良きものをつくれれば、自ずと古いものとの調和が生まれる。宅地化によってここに移り来た人々に緑を愛する心があれば、10年、20年の後には荒れ果てた山肌も再び緑で覆われるであろう。自然の風景とは、元来常に変化し、ひとつところに止まらないものなのである。